

は
た
か
道
中

佐
藤
弘
人

はつしや道中

佐藤弘人

書

新潮社版



は だ か 道 中

¥ 180

昭 和 38 年 7 月 15 日 発 行
昭 和 38 年 8 月 20 日 3 刷

著 者 佐 藤 弘 人

東京 都 新宿 区 矢 来 町 71
発 行 者 佐 藤 亮 一

東京 都 新宿 区 矢 来 町 71
発 行 所 株 式 新 潮 社
会 社
電 話 東京 (341) 7111~9 振 替 東京 808

乱丁、落丁本は本社又はお買求めの書店でお取替えいたします。

印刷・塚田印刷株式会社 製本・神田加藤製本所

© by H. Sato 1963 Printed in Japan

目次

結婚の式辞……………	七
最近の映画風景……………	二
ジャングル浴場は招く……………	一六
牛馬と神の話……………	二五
ボーナスの使い方……………	三一
ヘリコプターに乗って……………	三五
デモの裏話……………	四四
“合の子”天国……………	四八
わからない話……………	五一
これ以上よくならないのか……………	五四
私も女優なみか……………	五七

キッスを乗せて……………	六一
盛り場と女給……………	六四
銷夏のバカ話……………	六八
よく考えましょう……………	七四
男女神秘にたわむる……………	七八
男を警戒しよう……………	八二
うわさは恐い……………	八六
旅で拾った話……………	九〇
下品な話はよそう……………	九四
土佐の闘犬をみる……………	九九
アベックから新制遊廓へ……………	一〇三
生を楽しむ……………	一〇七
ストリップ神社……………	一一一

精力をつけるには	一五
流し目の薄笑い	一八
スリが多い	二二
白河の道祖神	二四
鼻を高くする	二六
どうかと思う	三三
発明で金もうけを	三五
家内との対話	三八
初参り風景	四一
老人の泣きごと	四四
東京の料理はまずい	四八
男女の優劣	五二
本能的なお話	五六

お吉の下田に行く	一六〇
わたしや健忘症	一六三
私の悪いくせ	一六七
停年退職の日	一七二
人間と神のY宴	一七四
弥次さん、大分、宮崎へ	一八四
私のよたよた運転	一九三
中風に倒れて	一九八
日々雑感（絶筆）	二〇五

装幀町 春草
カット 灘波淳郎

は
だ
か
道
中

はだかは美しいにせよ、醜いに
せよ、自然の姿の中にみなぎって
いる真実である。はだかの真理は
理性の歓喜で永遠のものだが、着
衣の真理は感情の歓喜で一時的で
ある。――

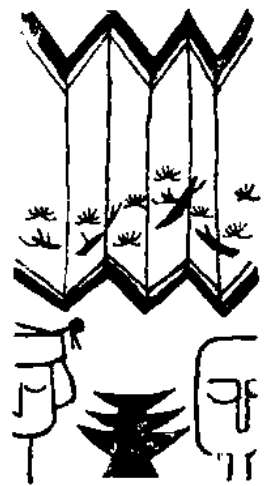
弘人

結婚の式辞

政府のいろいろな委員会や大学の教授会やこの頃盛んな結婚式……などに出席してみても話の上手な人というのは非常に少ない。「うまいなア」と思う人は十人に一人ぐらいしかない。出初めはみんなうまいが、あとが続かない。初めから終わりで理路整然と話の出来る人は少ない。われわれも学校で原稿をみて話をするときは筋が通っているが、原稿をとり上げられると話が前後する。記憶を合理的に長く続けるのは六かしいようである。この点役者は暗記に馴れているのでうまい。長いセリフを舞台で堂々とやっている。私もテレビで芝居をやり弁護士になって被告を弁護したことが

あるが、セリフがおぼえられなかった。つまらない会話のやりとりのセリフがどうしても頭にはいらない。セリフをおぼえた上での身ぶり手ぶり話ぶりだから芝居は素人には出来ない。このときほど役者商売の六かしいことを知ったことはない。

原稿なしでの話のうまいのは政治家、軍人、重役に多く、学者、法律家、文士は一般に下手である。勿論原稿を持った場合や理屈をいう場合には学者などは中々よくやるが、一寸した挨拶や話となると政治家の方がうまい。それは政治家は内容を問題とせず、おしゃべりを重要視するからで、一方学者は内容に重点をおいておしゃべりに力を



入れないからである。だから政治家や軍人の話が往々貧弱で内容のないのは当たり前である。

文士は書くのはうまいが、話はまずい。菊池寛、山本有三、吉川英治……など演説はうまい方ではない。一橋大学の中山伊知郎氏のように書くのも話すのもうまいというのはめったにない。大学でも役所でも両方うまいというのは一人か二人しかない。天二物を与えずで、両方出来るのは少ない。私はどちらかといえば、おしゃべりよりは書く方がいい。書く方はどうにでも直せるが、おしゃべりの方はそうはいかない。だから私は人前でおしゃべりはニガ手である。

先日私の後輩の山口君(三十七歳)がおそまきながら結婚式をあげ、私もその披露宴に出席したが、各名士が二十人ばかり得意の演説をぶった。が「うまいなア」と思う人はたった一人だった。勿論私も一席やったが、私のはうまいというより笑わせることを目的にしたのでうまいとはいえない。

披露宴の挨拶はみんないうことが決まっている。「夫婦は千代に八千代に相むつび相たすけ、互に我をすて順につき、常に妥協を以て進まねばならぬ」とか「夫婦は二人三脚のようなもので心を合わせることが大事である」とか「新郎新婦は今ここに新たに出帆する船だから暴風に耐える覚悟を常に持っていなければならぬ」とか「長い人生経験から新夫婦に献上したい言葉はただ和という一字だけである。これさえ厳守していけば家庭は永遠に幸福である」とか……ごく有りふれた、聞いてもよければ聞かんでもいいようなことばかりで、印象に残るものは何にもない。それは有りのままの人生をいわないで、少しでもよくいう、よくみられようとする気取り、かぎり、誇張、虚偽、ニセ正義感があるからである。「和の一字を提供する」といった人の家庭がはたして常に平和で幸福にいつているかどうか……。

そこで私は有りのままのことを話した。いいこ

とも悪いことも……。

——私は新郎とはここ二、三年來のつき合いですが、一緒にバーやキャバレーや料亭に度々行つたので新郎の性格はよく知っているつもりです。彼の特徴は仕事に熱心で非常にこまかいことと、身体の丈夫なこととです。欲をいえばきりがありませんが、男はこの二点さえあれば花婿として充分な資格をもっているとみていいのです。若い女の人は何かといえれば背の高い男、女に理解のある男を求めるが、容姿がどうの、男ぶりがどうのということは問題にならない。花婿としては第一に生きる力、生活力の豊富な人を選ぶべきです。（男性側から拍手）夫婦は愛さえあれば手鍋さげてもやっていけるといいますが、「経済」あつての愛で、食えないで愛などとてもないことです。つまり私のよくいう「男は女に卵を生みつけて、あとよろしくたのむ。おれは社会でまっ黒けになって働く」というのが原則ですから、男は仕事の出来る人、

活動力の豊富な人が一番いいのです。卵だけ生みつけて仕事をしないで遊び回っている男がよくありますが、こんなのはいけません。また女も愛されるだけ愛され、卵を生んで完全に育てない女もいますが、これもよくありません。何々女史とかいって内を外に飛び回っている女がいますが、こういう人の家の中はゴミだらけで（笑声）……。矢張り女はあくまで家を守り子供をそだてる人でないといけません。（男性拍手）

こういった点から新郎の山口君をみますと実に仕事に熱心で活動力を充分に持っていますから将来食いはずすことはないと思います。（笑声）しかし山口君は仕事に熱心なあまり多少こまかすぎる点がないではありません。例えば只今媒酌人から山口家の家族の紹介がありました……長兄が商事会社に、長女が郵便局に、次女がデパートに、三女が学校に——つとめているということをおっしゃいましたが、こんなことはそうこまかくい

なくてもいいのです。(爆笑)これは恐らく山口君が原稿を書いて媒酌人に渡したからだと思いが、実はそれほど山口君はこまかいのです。仕事にこまかいのは結構ですが、家庭でこまかいのは奥さんにきらわれます。主人は家庭では奥さんのすることはすみずみまで知っていても知らんぷりをして「うん、そうかそうか、よしよし」と鷹揚おつようにかまえていればいいのです。(女性側から拍手)それから欠点というほどではありませんが、一寸気にかかることは新郎は声がいいものですからバ―やキャバレーに行つて、おだてられてよく歌をうたうことです。それも粹きな小唄とか端唄ならいいが、「雨はふるふる城が島……」をやり出すのだからたまりません。「うまい、うまい」というと何回でもやる。ですからこれは花嫁のケイ子さんをお願いしたいんですが、新郎が宴会に行く場合、玄関で靴をはかれるときは「歌は必ず一回にしておきなさいよ」とくれぐれも念をおして頂き

たいのです。(爆笑)

それから新郎新婦に何か教訓めいたことを申し上げたいのですが、私にはどうもまじめくさったところがいいないのです。何んだか自己をいつわるよ
うで……。 (苦笑)「結婚とは人生の墓場である」と誰かがいったが、そういえばそうにも思えずし、「結婚はカゴの中の鳥で、外にいる鳥は徒らに中にはいろうとするし、中にいる鳥は無性に外に出ようとがく」(モンテーニュ)といわれると、成程そうかとも思う。夫婦は家庭の中でお互に首にツナをつけてひっぱり合っているようなものであるという。また「結婚は社会が許した単なる男女の野合ではないか。日比谷公園や外苑の森で野合している男女と少しも変わらないではないか」といわれると、なるほどと思う。また「男は厄介なことに女と一緒に暮らすことも出来なければ、女なしでは暮らすことも出来ない」(バイロン)。だから「女は新聞みたようなもので、朝起きて新聞

がないと淋しいが、あるからといって大したことはない」などともいわれ、また「男は水道のジャ口で、いつひねっても水が——つまり金が出るようでなければだめだ」ともいわれている。いずれもごもつともな話である。

そういった色々な「名言」や、私の家内との三十年以上に亘る人生経験から判断して夫婦生活は何が何んだかわからなくなる。(爆笑) だから、「まア、やってごらんなさい」というよりほかに仕方がない。(盛んな拍手) その上この頃、妙な民主主義がはやってきて細君連がいばってしようがありません。女の従順なのはせいぜい子供の出来るまでで、子供が二、三人も出来ると女は俄然強くなります。私の家内もこの頃いばり出して——だから今私のうちには主人が二人出来て、やりにくくてしょうがない。(大笑) 家庭での民主主義は私は大きいです。(苦笑)

とにかく人間は欲の皮のつっぱり合いで、どれ

もこれもエゴばかりで……そういうガリガリ同士が家庭をつくって一つ家に住んでいるのですから、よくいくわけがない。それを色々な社会的規範や道德律で結びつけようとするので多くの矛盾や無理が出来てくる。がこの矛盾や無理があるからこそ、そこに社会や家庭の存立がある。運動そのものが矛盾である。という見方からすれば家庭のゴタゴタや夫婦のいざこざは止むを得ないもので、矛盾の発生とこれが克服は永久に続くものでありましょう。まアそういった意味で、夫婦生活はやってみるよりほかに仕方がないのです。ですから、大いに一つやってみて下さい。(拍手)

ということとで挨拶を終わったが、えてして教会や修身の教室みたようになり勝ちな宴会場も、私の話でどうやらなごやかに運んで楽しい雰囲気がかもし出されたようであった。

最近の映画風景

映画をみるのは私の楽しみの一つで時間の許すかぎり見ることにしている。

それは芝居とちがって映画はテンポが早く、筋と構成が複雑だからである。

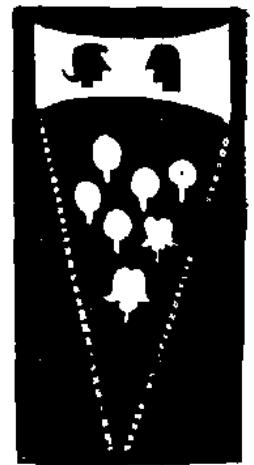
それと今一つは映画館の中でいねむりをすることが出来るからで、夏の暑い日など冷房のきいた映画館でたえなる音楽をききながら夢うつつの間をさまよう気持は何んともいえない。私ばかりでなく男の人には可なり「わが党」がいるものとみえてあちこちでいねむりをしている。が、女の人には、めったにいねむりをしている人はいない。きけば「折角金を出したのに……いねむりするな

んて……もったいないわ」とおっしゃる。女はあくまで経済的に出来ている。

さて先日「誰も教えてくれない」という映画の試写会に行ったが、それは最近日本でもはやっている無痛分娩というお産の映画だった。それをピート族の恋愛関係の中に折りこんで、みにくくないように上品にしかも芸術的に製作してあった。

が無痛分娩の説明が足りないのと、お産のときの実写シーンが大分カットされているのが欠点だった。

どの映画を見ても、見どころ、山どころがあるのに、その山がけずられていたのでは全体の調子



がこわされていた。日本では思わしくない点はいつでも教育上の点からカットされるが、それは十五歳以下の子供を映画館に入れるからである。欧米では子供は絶対に入れない。子供を入れておいで見るなどというのは無理で、教育上弊害があるから子供を入れなければならない。子供を入れないうにすれば日本の映画ももっと発達してくるだろうし弊害も起らないであろう。

が、日本では子供を入れないと、子供が可愛想だ、子供の自由を束縛するといった反対するものが多い。第一主婦連は子供をダシにして見に行く場合が多い。それに映画業者も子供を入れないと入りが悪くなるので反対する。

子供を映画館からアウトすることは日本では六かしいようだが、それをやらないといつまでたつても日本の映画は「十二歳」で進歩しない。

今東光の尼さんの映画でさえ宗教界から猛烈な反対に会った位だから、すごい恋愛ものや反倫理

性のものは容易につくれない。

例えば牧師に極悪の犯罪をおかさせた「ノート
ルダムのせむし男」や、高校の校長が校庭内に本妻とお妾をもつて一緒に住み、たわむれながら生徒を教え、最後に完全犯罪の名のもとに妾とぐるになつて本妻を殺す「悪魔のような女」や、ある片田舎の農家に一人の美女があらわれ、これが兄弟三人と関係し、結局、次男と結婚する破倫的な「素直な悪女」や……などは到底日本ではつくれない。そのくせみんなそういう映画を見に行きたがる。スタンダールの「赤と黒」もひどい破倫的なものだったが、若い女性はワンサとおしかけたものである。

以上でわかるように日本の映画は観客の層を子供から大人までの広い範囲にしているのです、きわどい深刻な映画はつくれない。そうかといって欧米のように数千人と十数億円を使う大規模なもの——「カルタゴ」や「シバの女王とソロモン」

や目下東京で上演中の「ベン・ハー」などのような豪華なものも出来ない。

こういった外国映画にはスクリーンに数百頭の馬が出てくるが、日本ではロケ先で三十頭の馬を集めるのさえやつとである。その上走ってくる馬が人馬もろともに倒れたり、馬の下で切り合いをやったりする危険な光景は日本では技術的に出来ないらしい。

日本の映画は極端に言えば美女と美男の俳優が芸をするのではなく、お話をしながら画面の上を行ったり来たりするだけである。胸をえぐるような深刻なものは出来ないようである。

そういった比較はとにかく、この頃日本の映画界も欧米並みにテレビにおされて青いき吐いきである。テレビで面白いのを見られるのにわざわざ金を出して出掛けて行ってまで映画をみる必要が少なくなった。

そこでアメリカでは製作方法を変えて数千人を

擁する大規模なものか、手に汗をにぎる恋愛ものか、極端な喜劇滑稽の笑いものか、「白い馬」のような高尚なものか……などにきり変えている。そうしないと観客がついて来ないのである。日本では金がないので中規模程度の「中作もの」しか出来ない。

テレビの影響と映画館が多く出来たことによって東京の映画館はどこでも入りが少なく、勿論特殊なものは別だが、たいてい八分の入りである。

しかしこの八分の入りは実は丁度いいので、欧米では映画館も電車も汽車もオリンピックでさえも八分の入りである。日本のように押し合いへし合いで立って見るようなことはない。つめ込み主義は日本の特徴で、日本が今総てに亘ってオーバーの時代だからそれはやむを得ないにしてもそれはちとひどすぎるようである。

特にこのごろのエロのつめ込みはひどく、朝起